

甌岳（1315m），へ

岩井 淑

11月19日（日）快晴

宮崎市から宮崎交通バスの特急で丁度2時間。

えびの市営露天風呂駐車場で下車。バスから降りた瞬間、高原の空気は冷え冷えとしているので体がシャキッとすする。

車道は凍結のためスリップが相次ぎ、登山口横でも事故が発生したばかりで現場検証中である。「今日はこれで4件目だ」等と言う言葉が耳に届く。

甌岳（こしきだけ）登山口はバスストップから50m程先にある。10分程赤松林のなだらかな道を歩くといよいよ急登が始まる。新雪に足をとられないように注意しながらの登りである。しかし、この急登もわずか15分で1315mの山頂へと到達する。

今まで登ってきた南側を振り返ると、雪を被った韓国岳（からくにだけ）が爆裂火口を見せながら圧倒的迫力で眼前に迫って来る。その韓国岳を背景に赤ん坊を背負った5人の家族連れが登頂記念撮影を撮っている。この甌岳は誰でも登れるので、家族連れで登るのにはとても手ごろな山だと思ふ。

韓国岳から左に夷守岳（はなもりだけ）へと続く稜線にも雪が見られる。もっとも稜線といっても山頂まで木が生えているので、それらの木枝へ雪がへばり着き、樹氷を形成している。双眼鏡を覗き込むと1本1本の枝まで太陽に照らされてキラキラ輝き実に美しい。

甌岳は山頂より火口底へ5分程で降りることが出来る。火口底へ降りてみると、ススキやクマザサの生い茂る直径400m程の丸く広〜い原っぱである。モグラの掘り起こした跡があちらこちらに見受けられ、ハイキングに来た2人連れの親子が日溜りで弁当を広げている。実にのどかななあと思ふ。火口底には池が散在するが、いずれも水は蒸発しているので入ってみると、キャラバンシューズがズズズッと踏み込む柔らかさであった。

山頂に戻って韓国岳を見ながら昼食にする。

登山口脇にあった市営露天風呂の事務所の赤屋根は赤松林の中に浮かび上がり、その上部では蒸気が絶え間なく噴出し続けている。こういう光景を見ると山が生き、呼吸をしていることを実感する。眼を右へと転ずれば、白鳥山の手前に六観音御池が松林の向こう側に青緑色の水を静かにたたえている。綺麗な池だなあと思ふ。

食事とパノラマ写真の撮影を終え、露天風呂で一汗流そうと思ひ下山し、事務所のおじさんに入湯料200円を払おうとすると、「今日は温泉の温度が35度と低すぎて入れんどです。気温も寒すぎますけん。せっかく来てもらたのに本当にすまんことです。」とザック姿を見つめながら説明してくれる。

パンフレットを貰いながら、「山の雪は何時、降ったの」と尋ねてみると「昨日、午後から曇りだし、夜から明け方に急に冷え込んだ為、雪になった」と言う。

パンフレットには泉質として酸性-アルミニウム-硫酸塩温泉、泉温41、5°C（気温18、0°C）、無色、透明、微腐臭、酸味、とあり飲用上の注意が書かれていた。

露天風呂に入れなかったのは実に残念だった。ビールを片手に樹氷で白く輝く韓国岳を眺めながら明日からの霧島連山縦走の鋭気を養おうと思っていたのに・・・

ま、しかたがない、と諦めて硫黄山へ向かう。

硫黄山への登山口は直径200mほどの不動池の脇から左側へとついている。不動池も六観音御池と同様に瑠璃色の水をたたえている。ここら辺りは日本最初の国立公園として、瀬戸内海、雲仙とともに設定された霧島国立公園の中心地である「えびね高原」なので、誰でも登れるように石段や石畳で整備されており、10分も歩けば硫黄のガスが噴出し続ける山頂へ到着する。

山頂には塞の河原やボカボカ沸騰した温泉とガスが猛烈に噴き出している大地獄や小地獄などをぐるりと回れる遊歩道が作られている。また、いたる所に『立入禁止』の立て看板が立っているのが目だつ。小1時間も山頂周辺を歩いていたので硫黄ガスで喉をやられてしまい、調子が変わる。

宿泊は国民宿舎『えびの高原荘』である。

利用料金は、A、B、Cと3段階に別れている食事によって変わって来る。私の場合、Bコースと一品料理として猪鍋を注文した。ちなみに、出された夕食と朝食のメニューは次の通りであった。

夕食

カボチャ、シイタケ、エビの煮物、サワガニ、ワカサギの揚げ物、マスの甘露煮、鶏肉のニンニク焼き、コイの洗い、茶碗蒸し、山菜の胡麻味噌あえ、サラダ、おしんこ、ミカン、猪鍋、ご飯、味噌汁、

朝食

シシャモ、サツマアゲ、子持ちコンブ、焼きのり、生卵、昆布入り煮豆、梅干し、おしんこ、ご飯、味噌汁、

これに夕食時に日本酒1本、焼酎2本を飲んで9782円であった。